

第4回 香南市まち・ひと・しごと創生総合戦略策定委員会 議事録

- 開催日時：令和2年2月21日（金）10:00～12:00
- 開催場所：ふれあいセンター 2階 第1・第2研修室
- 出席委員：受田浩之委員長、田内修二副委員長、岡林八重美委員、中脇正人委員、古川和佳委員、田中愉之委員、長崎篤史委員、水田貴士委員、國松美紀委員、土居秀臣委員
- 事務局：猪原商工水産課長補佐、前川こども課長、岩田地域支援課長、西内企画財政課長、浜田企画財政課長補佐、田渕、嶋内

【次第】

1. 開会
2. 委員長あいさつ
3. 議事
 - (1) 第2期香南市総合戦略の概要について
 - (2) 第2期香南市総合戦略（案）について

- 委員長

総合戦略が総花的に陥って、「総合戦略が総合計画と一体化してしまう懸念があるのではないか」といろいろなところで指摘されている。総合戦略は総合計画と違い独自計画であり、平均総花自前主義から脱却して、特化し、足りないものはとってきて、育てるものは徹底的に内側から成長させていけばよい。ご当地の色をいかに濃くするかというところに、前向きなご意見をいただきたい。資料を見ていただくと、色がついて見えるところがあるのではないかと。これが、この色で良いのか、この濃さで良いのか、コントラストはこれで良いのか、他に色をつける場所はどこなのか、こういうことをイメージしていただき、具体的に実現するための手段を考えていくということが戦略になっていくと思われる。ひとつひとつの取り組みも非常に重要ですが、全体像の色をイメージしていただきながら議論を進めていただくと非常に有意義な時間になる。

優先的に取り組む施策の「次世代を担う若者に香南市の魅力を伝える取り組みを強化する」。これは、かなりこの策定委員会においても意見をいただいた内容ではないかと。皆さまの意見を伺っていて、香南市の多様性をどういう風にデザインしていけるか、多様かつ新たな姿勢をとる面でもより持続的に展開していける可能性のある魅力づくりを域内だけでなく外部も含めて、次世代にしっかり見せ、相対的な価値を認識していただけるような地域づくりというところでご意見をいただいているのではないかと感じている。

事務局としては、これまでの意見と独自色を出すという方向性を元に描いている。これを今日はかなり正案に近づけたうえで次回提案する基礎固めとしておきたい。

■委員

「次世代を担う若者に香南市の魅力を伝える取り組みの強化」について、DMO協議会が取り組んでいる中では、「山北みかんのツアー」が1番近いのではないかと。「観光の着地点は就農に尽きる」ということで、受け入れ先から提案をうけている。「観光のお客様をお迎えして、私たちが収益を得る」だけでなく、「入口は観光であるけれども、出ていく先は就農に繋がる」ような仕組みのプランをDMO協議会は造っていると思う。1番大切なのは学習の要素になっており、子どもたちに学習させる要素を観光に位置付けて「ちょっと面白い見せ方をしましょう」ということをしている。例えば、ミカン狩りをただするだけではなく摘果作業から体験し、それが大きくなり、皆さんにスーパーで買い物をしていただく。から始めて、おいしいみかんはどれだと思う？から考えさせ、実際に自分でみかんを獲ってきて味を比べてみる。といった遊び感覚の学習要素を丁寧に織り込んだツアーを開催している。

観光に地域の魅力をのせて発信することが1番の要素と思っている。観光とは、観光客を呼んで来て、その周囲にお金を落とすという仕組みが一般的な考え方だが、反対に地域の方がたくさん活用できるものであると思っているので、発信したいものを観光にのせて発信していただきたい。私たちはどのように発信してもらえるのかを明確にお客様である地域の方にお伝えして、双方にメリットがあるような形で観光を続けていきたいと思っている。

■委員長

次世代を担う若者を対象としながら、シビックプライドに相当する地域の魅力を交流人口の拡大から関係人口や移住人口に繋げていく。そのメニューがどれだけあるかによって、その部分が変わってくる。

地域内のメニューをどう充実させていき、魅力ある香南市の学習の場を長期的に組み立てていき、同時に観光要素として交流人口の拡大から関係人口を増やすことを見据えて開発していくことになる。

■委員

色付けがまだできていないことや香南市の戦略的にコアなものが見えてないということについて、合併しているので、それぞれ文化が違う「多様性」を売りにするのか、「観光」をコアにするのか。敢えて地味だけど「住みやすい」をコアにするのか、あるいは、スタンダードとして「子育て」にするのか。

ある雑誌にザルツブルグのことが掲載されていた。そこでは世界的な音楽祭が行われていて、その音楽祭が世界的に有名になるまでには100年かかっている。100年の計画を立てるということは、継続性ということで大事だが、そこには外部からの目や自分たちが気づいてない資源があるのではないかと。気づいていてもそれをブラッシュアップしていくことが必要だと思う。また、それを引っ張っていくものとして政治も大事だと思っている。香南市は何なのか、「住みやすい」なのか。「赤岡の絵金」「山北みかん」「三宝山」など、いろいろなコンテンツがあると思うので、それをどうブラッシュアップしていくのか。何を香南市の特色をして出していくのかがまだ見えない。

■委員長

以前ワークショップを開催した時、清藤市長が「文化を統一しようと考えていたが、この5つを多様な世界と意識して、このまま考えていっても良いのではないか」と言っていた。それぞれの文化と多様な5ヶ町として息づいた色がある。その色があるからスペクトルになり、融合すると新たな色彩を持つようになる。コアがひとつあって、そのコアを超えていく、色を生み出していくようなイメージが必要。先ほどの観光と学習を一体化した取り組みの意見のように、学習と更に一体化させながら、外の目をもっと入れ込んで、魅力づくりをして、日本のザルツブルグを目指しましょう。

■委員

外から見て香南市はとても住みやすいところ。第2期総合戦略でも引き続き、子育て環境や就業関係など取り組んでいくということなので、働きやすい・住みやすいといったことは感じてもらえると思う。香南市にフォーカスしてもらうためには「日本のザルツブルグである」など「なるほど面白いな」という視点がないと、香南市に着目してもらえないと思う。着目してもらうための参考として、私の主人は三重県鳥羽市出身で、そこは海女さんが有名なところだが高齢化が進んで海女さんがいなくなっている状況があり、そこを盛り上げようと取り組んでいる。女の人しか行けない島があり、そこにある神社にSNSが発信となり人気に火が着いて女の人がたくさん来るようになった。そこから海女さん文化に着目するようになり、海女さんが増えてきた。また、おばあちゃんの海女さんが漁をしている姿が美しいということで、その姿を写真に残したいといって若い写真家の女性に移住して、それを盛り上げるために市として、その人が潜って獲るアワビをタダにしましょうといった対応をしたら、それがまたSNSで発信され、その取り組みがフランスで注目を浴びた。さらに、海女文化をフランスで広める取り組みとして、実際に現地に赴いて海女さん文化を紹介することがあり、そこからフランス人の観光が増えた。海女さんは漁の後に海女小屋で暖を組み合わせながらご飯を食べるが、それを観光化し、外国の方をたくさん呼び体験させることに繋げた。元々ある文化の魅せ方を少し変えることによって面白い・興味深いと思ってもらえる。私たちが当たり前と思っているけれども実際に外から見てみると「これは面白いかもしれないね」というものをひとつ見つけたら、香南市に住みたいと思う人が増えてくると思うのでその何かを見つけることは大事だと思う。

■委員長

明珠在掌という言葉があるように、足元に光っているものはたくさんある。どこに目を向けていき、その価値を誰に発信していくか。香南市内には本当にたくさんの資源がある。

■委員

最近よくアジア系の人を見かけることが多い。海風荘を改装して介護等の専門学校（香南学園）ができ、去年で17人程度の若い方が学びに来ており、将来的には香南会で働くと思われる。来年に20人程度来ることになっており、それは移住という形で香南市の担い手になり、香南市にとっていろいろと良いことがあると思っているが、市の各種計画を見ても載ってないので、見逃すのは勿体ないので入れていただきたい。

障がいのある方やバリアフリー観光について勉強していて、総合戦略のなかで子どもや高齢者については非常に網羅されているが、障がいを持った人たちについてはあまり出てきてないように感じる。バリアフリー観光を先進的にやっている沖縄の話をよく講師の先生から聞くが、観光でいうと障がい者の方は健常者と比べてお金を落とす額が1.5倍程度高いとのデータもある。名実的に障がいを持った方に優しいまちにすると結果的に住みやすくなり、観光客も来るなど、良いことづくめではないか。インバウンドや移住など他市町村もやっている施策よりも、特化してやる方が香南市の魅力になる。また、バリアフリーはハード面であまりお金がかからないといろいろな人から聞いている。優しい気持ちで当事者の気持ちになって施設などを見直しすることが非常に多く、沖縄などは福祉の専門家が観光に出て教えている。多様性の話になると思うが、いろいろな分野を計画に入れていただければより良くなるのではない。

■委員長

これだけ人口が減ると移住政策に頼るしかないのでは、と言っている割には腰が重く世論自体が盛り上がってきてない。すでに一定の期間日本に居住している外国人は250万人（日本の全体の人口の2%）を超えているが、これを我々はほとんど認識していない。重要なことは将来的に外国人で居住している方々が日本に対してどれだけの愛情を持ってくれるか。また、2世・3世としてではなく日本人としてどのように貢献、あるいは一員になってくれるか、というところで将来は劇的に変わる。そういう部分を香南市としてどう考えるか。

また、障がいを持った方の視点はとても大事なことである。障がいをお持ちの方や多様な方々にどれだけ優しいかというところが市内外に対して伝わり、香南市の子どもたちが自分の未来の生活空間である香南市をどれだけ誇りに思ってくれるか次第である。その気持ちをどれだけ形に表していくかというところで今の意見はすごく大事ではないか。

■副委員長

香南市と協定を結んでいる会社と先日話す機会があり、就労ビザの改正を受けて「これから香南市としても外国の方の受け入れはどうか」を問われた。現時点で市として取り組みはないが、これからそういったことが増えてくるとされる。自治体として行政としてどのような仕組みができていくのか、そういった事を考えていき、協力できるところは協力していく。

■委員長

入管法が改正されて、特定技能1号2号など、かなりハードルを上げて「入る資格を与えます」といっている状態であるが、日本はOECD（経済協力開発機構）の中ではほぼ最低賃金であり、長期的に2040年や2060年を考えると将来的には選んでももらえない国になりつつある。「来てください」と言っても来てくれる人がいない。

この話は、移住施策をどうしますか、といった国内の関係人口や移住人口を奪い合っている構図と将来的には一緒になってくる。よほど魅力がない限り「来てください」といっても来てくれない。そんな中で、本当に選ばれる地域にどれだけ早く変貌していく

か、それによって魅力が魅力を呼んでくるようになるので、持続可能性というのがアップされていく。それをいち早くどうやって作っていくか、そこに規制というものが横たわっているとすると、どのように取り除けば、できることは何かということが戦略としては出てくると思う。

また、障がい者を具体的にイメージした時に、観光施策として独自性を持って考えられているものは何かあるか。

■市長

市としては独自の施策はないが、関連としてはYASU海の駅クラブの取り組みが挙げられる。海の駅クラブで、年に1回、障がいを持った方に来ていただき、アクセスディンギーという操作が簡単なヨットに乗ってのレースを行っている。はじめて10年以上になるが、あまり外にも出歩かなかった方が、アクセスディンギーに乗って風を切って疾走し、「まさか自分がここでこんな体験ができると思わなかった」と非常に喜んでいただいて、そこから今年度まで続いている。

■委員

高知県のおもてなし課でバリアフリー観光などのバリアフリー関係の事業をたくさん行っている。その中で広域の観光協議会（県内6社）が窓口になり、県のさまざまな施設・ホテル・主要な道の駅などを全部調査してもらっている。内容としては階段や車いすが全部通れるかなど調べていただいている。一昨年から取り組みが始まって海の駅クラブにも調査に行かせていただいている。物部川エリアは1名担当をつけていて、専門家と一緒に回っている。専門家には伊勢志摩のバリアフリーセンターから来ていただいた方や、他の講師としては、旅行会社でバリアフリー専門の観光を特化して作っている会社が1社、クラブツーリズムという近畿ツーリストがやっているところだが、全盲の方に運転をさせるなど、すごく斬新なことをやっている。そういった方が講師として来られて、YASU海の駅クラブさんのヨットなどいろいろなものが活用できるということで、1年間の調査に行かせていただいたような経緯がある。今県がやっている事業にプラスしてということと、福祉の賞を県下で初めて海の駅クラブが受賞されたと記憶している。その部分を特化して講演やツアーにできないか昨年からの海の駅クラブさんと事務局の方には何回もご相談させていただいて、来年度の事業として話を進めていきたい。

■委員長

基礎固めが出来つつある。

■委員

市でどのようにプラスしていくかというところで大きくなっていくと思う。

■委員

大分県のハウスミカン部会の方と農業の情報交換会があり、そこに20代の就農者の方が来ていて、自分なりにどういった理由で就農したのか質問した。大分も事業内容は香南市と大体似たような内容であった。なぜ22歳の女性が就農して一人でハウスをやっているのか、自分たちからは考えられない世界であって、実際やっつけられるのかと思

ったが、本人はそれでもやっていきたいという思いがあり、すごい魅力ある話を聞いた。大分県では「次にあなたが作ってください」と、現在既存でやられている方がハウスをそのまま譲る仕組みができています。香南市には無いシステムだと捕らえた。そういったことで次の担い手を構えていき、広げているので衰退化もしないということが情報交換会の中で感じ取られた。また、香南市では魅力の発信が不足しているのではないかと感じた。今は地域おこし協力隊の中で就農しようとしている方がいるので、そういう方から魅力の発信があれば変わってくると思う。

■委員長

発信の仕方一つである。

■委員

就農の体制が香南市にはないところだと思った。香南市でいうと、長年農業をやられていた方が辞める時の1つのケースとして、施設の老朽化を見て継続か継続でないかを決める。大分の新規就農者の方にそういった問題があるか無いかは分からないが、その辺が香南市と違うと感じた。

■委員長

日本中でこういう取り組みが一斉にされているなかで、どこが競争優位なのか、魅力があるのか、という比較は絶対に必要。みんながやっているから同じようにやっているが、なぜ人が来ないんだろうといっても、来るはずがない。

■副委員長

市としては、山北みかん部会のなかで、今後廃園の危機感のある農園の後を継いでいく取り組みがあるが、これは全国的にどこも取り組んでいる。

市の施策のなかで、移住の施策については少し遅れてスタートしたけれども、興味がある職員を嘱託という形で雇い、そこから伸び始めた。人と人との繋がりから伸びていったということもある。

■委員長

情報発信の仕方についてはさらに踏み込んでいかないといけない。

他の地域との競争のなかにいることを認識し、いろいろな施策を展開しているものが、どういうポジションにあり、どれくらい魅力的なのか、誰に対して魅力的なのかという話になる。マーケティング戦略を持ち込まないと、みんなの総花的に「これがあるのでどうぞ」と言っても誰も振り向かない。ある人を想定して、その人に来てもらうにはどうしたら良いか、ということを考える。年収・子育てはどのようにしたいのか、などその人の人生をさまざま想定して行い、そこに答えられる環境がここにあるかどうかを展開できるかどうかである。ただし、そこを広く相場でお揃えしました、来てくださいと言ってもそこに合致する人はいないので、かなり精密なマーケティング計画を今回は持たなければならぬのではないかとアドバイスをいただいたと判断した。

■委員

総合戦略の新たな雇用を生むという面で、空き店舗を活用しての創業については積極的な対応をする方針で実績はある。商工会と情報を交換しながら対応している。漁業や

水産業は、予算はあるけれども実績がない状況。これからどのように取り組んでいくかが課題になっている。資金面で援助できなくても情報提供やお客さんとお客さんも取り次ぐので、銀行に対しての見方を、お金を預けて借りてということだけでなく、利用していただけたらと思っている。

■委員長

創業のスタートアップの実績は。

■委員

1年間に10件もない。実際に創業されている方がいたとしても、すべてが野市店の実績ではない。

■委員長

創業にもいろいろな形態があるため一概には言えないが、前回市長が言われていた宮崎県の日南市のケースで見ても、IT企業のスタートアップに対しての興味関心はもとも高い。

■事務局

今年度、首都圏にあるIT企業を1社誘致して創業を開始している。来年度に向けても現在動いているところである。商工会と話をした時には事務系に限らず、最近創業される方のパターンが空き店舗に入ることに限らず、マンションの1室を使ってサービス業が開業されることも増えていると情報を聞いている。

■委員長

このあたりを繋げていかなければいけない。例えば、コンテンツ系であったりデータサイエンス系であったりいろいろな創業で期待される場所として、県はイノベーションラボをつくり、ニーズ先行のスタートアップやIT系企業の開発支援にあたっている。課題を先に認知して展開していく取り組みを活発にしようとしている。

香南市における商工業のなかでは、山本貴金属地金（YAMAKI N）が今後のビジネス展開でいろいろなプランを描いていて、大学とも連携をしている。第2創業も今後は期待できる。誘致企業や地場でもしっかり定着してくれている企業が今後どのようなビジネスプランを描いているか。それがIT系の企業とアライアンスを組んでいくと何が起こるか。集積していくというのはそういうことである。最初からシリコンバレーをつくるのではなく、YAMAKI Nさんがいることが結果的に40年ほどしたらデンタルのデジタル化というところで貴金属からセラミックスに入り審美性を高めていく、デジタルでの歯科技工の世界に入っていく。そういうところからビジネス展開していくと、デザインとまったく予想もつかないものが結びついていく。それが集積していく形が見えてくると、香南市はすごいものがクラスター化されているという結果に繋がる。

今後は誘致企業を募っていくような工業団地の整備の際にストーリーが描けるかどうかにかかってくる。そこが今後の分かれ道になってくる。

■副委員長

事務系・IT系企業の誘致を進めるなかで、IT系企業がこの地域に非常に興味を持ってきているのは、空港に近いなどの立地条件の他に、大学やポリテクカレッジがあ

る。その人材の確保がどうできるかというところにすごく興味を持たれている点として上げてくれている。今後その点をどう生かしていくか、既存の製造系の企業とどう繋げていくかということが今後の課題である。

■委員長

基本目標4のなかに「大学との連携」と書いてくれているがどこまでやれているか疑問に感じる。今のようなリクエストが出てくると、「いつでも・どこでも・誰とでも」ではなく、「今だけ・ここだけ・あなただけ」を、香南市として学生の皆さんに何を提供できるか、それが地元企業の定着にどう繋がるかを完全に差別化していただいて、香南市としては「市民だと授業料は全額市が負担します。就職も保証します。」と言ってきて、未来に対する不安をなくし、夢に向かって何か保証してくれるものがあれば、絶対に全然違うと思う。

■委員

資料を見ている、さまざまな分野で事業が行われており、補助金があることなど、いろいろあることが分かった。20年前と比べて子育てについても充実していて魅力である。ファミリーサポートセンターなども充実し、委員の皆さまが言うように香南市は住みやすいと思っている。ただ、奥の地域の人口が減っていることについては自分も仕事の中で十分実感しているところで、仕方ないことだとは思いますが、県外の方でもゆっくりのんびりしたところで暮らしたいと言われる方も多くいる。香南市の立地として空港・高速が近いが、自然も豊かにあり、ゆったりしているけれども便利なところや、企業も都会でなくても入ってきているので、そういう取り組みをしていただければと思っている。

イベントや特産品については高齢化などで下火になってきている。地元にも20年ほど前に出来た製糖製作組合という黒砂糖工房があるが、高齢化していて会員が少なくなってきている。もっと盛り上がってけば香南市の特産品として販売できるのではと思っている。家でもサトウキビを栽培していて、工場にも「機械見せて。作っているところを見せて。」と見学に来られることもあったが、できればそういうことも体験や参加、販売など、香南市で生産する方が増えるなど、安定したら良いと思っている。

2月開催の大凧上げについても、県内外から人が来られるイベントではあるが保存会の方が高齢化していて、いつまで続くか分からないと言われている。それに限らず、さまざまなイベントや神社のお祭りごとなど高齢化や後継者がいない。以前には、香我美町では地引網をやっていた。そういう事がまた出来れば、他からも人が来てくれる。自分の子どもも小さい頃に体験していて思い出に残っている。いろいろなことが続けて盛り上がっていったら良い。

■委員長

イベント・特産品に関しては伝統が途切れているものも含めて、もう一度整理していくことが必要。地引網の担い手に関しては経営的な面での問題があって今に至っているのだろうが、発想を変えていき、観光視点で完全にやっていく。100 豊凧の話はテレビでも拝見したし日経新聞にも特集記事に「経営が厳しい」と書かれていた。この話は全

国に向けて発信された記事になっており、相当な価値がある話だと感じたことであった。また、ケーブルテレビはデジタルデータの宝庫だと思っているが、視聴者の情報として視聴率などをとることは可能か。

■委員 現在とることはできないので、どれだけ見ているかアンケートで答えてもらっている。個人情報のできる壁があるからではなく、技術的にできない。

■委員長 市民が何に関心を持っているかは、ケーブルテレビの視聴のデータを見れば、何に興味を持っているのか把握することができるのではないかと。把握することが出来れば、全てが分かるのではないかと思う。もし、データ的にとれるとすれば、その関心の部分から取り組みを進めていく。あるいは、ケーブルテレビにおける番組の編成において何を放映すればどれぐらいインパクトがあるかなどが分かる。

■委員 指標にあるそれぞれの内容に関して、高知県内の市町村で唯一産業振興計画を策定している香南市なので、県の総合戦略の中身とほぼ似ていると実感している。県も基本目標が4つあり、1つ目が「地産外需により魅力のある仕事をつくる」、2つ目が「新しい人の流れをつくる」として、県内の高校生・大学生の県内就職率、県外に出て行っている大学生を県内に引き戻すための取り組みと移住促進ということで、先日の新聞にも記事掲載されていたが移住者数1,300人と目標を立てて取り組んでいる。3つ目が「若い世代の「結婚」「妊娠・出産」「子育て」の希望をかなえる」と「女性の活躍の場を拡大する」としており、こちらについても香南市の基本目標とほぼ似ているかと思う。4つ目が唯一違っているが、「コンパクトな中心部と小さな拠点との連携により人々の暮らしを守る」として、集落活動センターの取り組みをメインに取り組んでいる。現在、高知県内58カ所の集落活動センターが立ち上がっているが、80カ所に増やすという取り組みになっている。そのひとつに香南市の岸本集落活動センターも含まれている。

本日の会でも企業誘致について意見がでていたが、企業誘致については粘り強く、地道な取り組みで伸ばしていくことになる。

高知県は企業立地課が事務系企業誘致、IT企業誘致については産業創造課が行っている。ITコンテンツ系の方が首都圏ITコンテンツ系ネットワークをつくり、そこで交流会等を図り人や会社の呼び込みをしている。また、ITコンテンツ系となると技術的に必要になってくるので即戦力になる為にITコンテンツアカデミーというものを開講している。

企業立地課の事務系の方では、平成16年度から本格的に誘致を行っていて、当時はコールセンターの誘致が多かったが、バックオフィスの企業誘致が増えてきている。平成16年から取り組みを始めて、企業誘致は全国で競争になってきている。都市部の企業がバックオフィスをつくる場合に何を求めてくるかという「人」である。東京・大阪といった都市部では人を集めづらい。バックオフィスは必ず本社にいなければならないものではないため、地方にあってもかまわないということになるが、人が集めやす

いことが条件になってくる。各県はどうやって人を集めるかということのをいかにアピールしていくか。また、補助金という行政の支援も肝心になってくる。

高知県は事務だけでなく製造業もある。企業の立地候補として残ることも多いが最後に落ちてしまうので、16年間取り組んできて15社というのが現実である。また、高知県は南海トラフ地震の発生が近い将来懸念されているため、企業の希望としては必ず津波のこない場所を言われるし、誘致対象の交渉している企業だけでなく、取引先からも止められることもあるためハードルが高い。

企業立地課が行っている特別な取り組みとして、人の確保の関係でいうと、県内の大学・専門学校に個別に求人中の企業紹介や会社説明会などを行っている。企業の募集を考えているところが対象になるが、合同会社説明会も開催している。

あとは、ハローワークとネットワークを組んで意見交換し、どのような企業かをハローワークの職員に見てもらっている。そういった高知県の地道な取り組みを企業にアピールしているので、香南市も県と連携するも良いし、独自でやれることをやっていただきたい。

■委員長

人口が減少しているということで総合戦略を策定している。この10数年の間に状況が随分変わってきていることをどう考えていくか。

県の取り組みと進捗を念頭において、香南市としてどのように取り組んでいくかというところだと感じた。県と競争しても効果的ではない。また、県と全然違うことをやるというのも有効ではないのでどうすれば良いか。

皆さまの意見や今までの流れを見てきて個人的に感じることについて意見を述べさせていただくと、かなり時間をかけて議論していただき、総合計画を策定しているわけではないので、まずは総合戦略としてきりと光る独自性をどこに目指していくか、を各委員の方には相当意識していただきたい。その中で、事務局サイドから「次世代を担う若者」「今、香南市に住んでいる子どもたちに対して魅力を遡及していく」という大切さを、今一度、総合戦略においては柱に据えていく。ここはかなり委員の皆さまから頂いた意見に基づいて色濃くしたものであり、異論なく認めていただけるということによるしいか。

■委員

よろしい。

■委員長

ここを中心に据えて、外にも間接的に発信していけば良いし、子どもたちから見て、大人たちのやっていることは子どもたちに魅力を伝える行動になっているか、その行動が本当に子どもたちの地域に対する愛情を増しているか、その成果指標が欲しい。

香南市の子どもたちは今どれぐらい香南市を愛しているのか、指標にするのは難しいと思うが、「地元が好きなのかどうか」「ここで暮らし続けたいかどうか」。その意思を、どういった形で確認（分かるようにすれば）していくかどうか。

- 副委員長 先ほどの質問項目に答えるような具体的なものではないが、教育委員会においてアンケートを学校が実施している。
- 委員長 そういった資料があれば、それを Before・After として、それがどのように改善されたかを指標にしていけばよいのではないか。それが上がらないとすると、何をやれば上がっていくか、というところを紐づけて、K P I（重要業績評価指標）に繋げていく。K G I（重要目標達成指標）という言い方もするが、K G I が「次世代を担う若者に香南市の魅力伝える取り組みの強化」であれば、伝えたいことは「香南市の魅力」。魅力があるかどうかは 100 点満点で見た時にどれくらいの点数となるかというところ。
- 副委員長 産業振興計画・人生支援計画と同じような形で、教育委員会では教育振興基本計画を策定している。その中でも、課題・評価をいくつかの K P I で表している。再度その計画も点検してみる。
- 委員長 農業分野の目標において新規就農者数を 10 人と設定している。これは、今後の香南市をどれだけ良くしていくのか、読めない部分である。この具体性の部分を「教育振興基本計画」に紐づけていった時にどうなっていくか。
- 香南市としても思いきった特徴として、「次世代を担う子どもたちに香南市の魅力を伝えきる！」。それを通じて地域内に住む人に向かって魅力の発信に繋げていく。その魅力の中には産業・文化・自然の資源・人があるので、この取り組みをずっと繋げていき、メニューとしてまだ形になっていないものをしっかりとマーケティング戦略をもって、どう戦っていくかをストーリー化していく。さらには、途切れそうな産業を目的に照らした上で、どう復活させ継続していくのか。
- 多様性は 1 つのキーワードである。多様な世界をどう目指していくかというところが魅力づくりの 1 つの出口になっていくという考え方もある。外国人や障がいをお持ちの方に対する思いが、どこまでこの地域としてインクルーシブな世界をデザインし、現場に反映させていくか。これを持って、子どもたちに「香南市はここまで優しい地域なんだ」ということを訴えていけば、その優しさを子どもたちは 1 番最初に伝える。そういった意味で、K G I の形に反映できるようにする。こういった技法で勝負している地域はあまり聞いたことがない。
- 委員 子どもたちに地域のことを愛して欲しいということで、小さいながらもクイズ大会を物部川フェスタで始めている。昨年は 86 人の参加で、地域の産業などさまざまなことを盛り込んだクイズ大会としている。「地域のことをもっと知りましょう。」ということで、地域のことを勉強してからクイズ大会に臨んでもらうようにしており、第 1 回目の優勝者は香南市内 5 年生の女の子だった。今は 2 代目まで物部博士がいる。こういった地道な努力がどこかで実れば良いなと思いながらやっている。
- また、DMO 協議会では、地域協働学部の学生 4 人を週 1 回のスケジュールで 2 年間

通しての受け入れをしている。その4人がつくったツアーが明日催行予定であったが、最小催行人数に満たなかったためにモニターツアーとして催行するようになっている。17人が参加し、親子で体験してもらうこととしており、子どもが心の成長に繋がるように、子どもが親から独り立ちできるように、子どもの心の成長の課程を考えてつくったツアーになっている。その中で、地域の方とやりとりする中で、香美市のフラフ工場に行くのだが、通常であればA3サイズの色付けのみした行っていないが、学生たちが家族の思い出にしたいという思いを伝えたところ、今までやってなかったが1.2m四方のサイズを家族でつくるという体験をしましょう、と新しい取り組みをしてくれることになった。こういったきっかけは素晴らしいと思っていて、産業を残していくには、新しい視点が重要で、学生などは地域の人を持ってない新しい視点を持っていて、地域の人とその新しい視点を受け入れてくれたから、新しい観光や産業を残すといったことになる。そのことに賛同してくれるお客様がいて、大きなフラフが飾れない家は、部屋にタペストリーやカーテンのようにして飾っている。そういうこときちんと発信すればその産業は残っていく、という位置づけで目線を変えていただくきっかけになったと思っている。こういう視点で香南市の産業を残すというところにおいても、後付けをつくる必要があるのではないか。

■委員長

産業教育というところで、教育の中に入れてたり、家族の特別な日に記念としてそういう作品を残したりして、産業を伝えていくことも香南市ではできるのではないかという話だった。前段の話は教育委員会を巻き込まないとできない。子どもたちに何かをという話は「学習指導要領の関係があるのでできない」というところから始まるが、教育委員会にも「総合戦略や人口ビジョンは子どもたちのために重要である」ということと、教育委員会こそがその重要な役割を担う機関であり、どうすればできるかということ、規制を前提に考えるのではなく、規制をとっばらうことを中心に一緒に考えていくことになる。

そこを突破口にしていくには、この「総合戦略策定委員会」を活用することが非常に効果的だと思う。学校教育現場で総合戦略のKGIの設定まで考えていただくこと、教育委員会の役割に大いに期待するところがあるので、総合戦略のなかで教育委員会に対しての具体的要望が出てきたり、まさに教育委員会が変わっていくKPIが盛り込まれたりすると、これまでとは全然違う色が出てくるかもしれない。

■委員

教育委員会で教育振興計画策定10年以上関わっている。また、子ども子育て会議にも10年以上関わっているなので、その場で今日のこういった視点の話をさせていただきたい。

■委員長

一体感を持ってやれるべきところだとすると、私たちが描く理想的な形が香南市としては展開されていく。そういう話がみなさんの意見を聞いて見えてきている。

事務局とも相談させていただき、今日の話盛り込んだ形を次回の策定委員会では提

案していただきたい。今後の予定としては、その後1か月程度パブリックコメントを市民に募った後、5月にそれを正案にするという形で進めさせていく予定となっているが、その予定でよろしいか。

■委員

意見なし

4. その他

5. 閉会